

これからの防災教育

—防災まちづくり・くにづくり学習—

唐木清志(筑波大学大学院准教授)

「これまで」の防災教育

- 自然災害の多い日本では、以前より防災教育が重視されていた。
 - 防災訓練：「防災の日」(9月1日／関東大震災)
 - 『学習指導要領社会科編(Ⅱ)』(1947年)
 - 中学2年／単元5：自然の災害を、できるだけ軽減するには、どうすればよいか。
 - 郷土では、これまでに地震によって、いつ、どんな被害を受けたか。これについて、できるだけ古い時代から調査をして、その表を作ること。
 - 郷土では、地盤が強いといわれている地帯はどんな所か。また反対に地盤が弱いといわれている地帯はどんな所か。両者の間には地形や地質の上から、どんな違いがあるかを調べること。
 - 郷土では、大地震に際して、どのような所へ、避難するのが一番よいといわれているか。そして、それはどんな科学的根拠を持っているかを調べ、これについて討議すること。
 - 時計を用いなくて、ただ数を数えることによって、秒数をあてる練習をすること。そして、他日、地震が起こった場合、直ちに初期微動継続時間を想定し、その秒数を8倍することによって、震源の大体の距離(キロ数)を判定すること。

「これまで」の防災教育（課題）

- 神戸市教育懇話会（1996年）
 - 震災体験を生かす神戸の教育の創造
 1. 学校における防災教育について
 - 幼児児童生徒の防災上の必要な知識
 - 幼児児童生徒の防災上の必要な避難訓練
 - 幼児教育のカリキュラム開発
 - 設備・機具などの安全管理
 2. 震災体験を生かす教育について
 3. 神戸の新生教育を目指して
- 「これまで」の防災教育の課題
 - 防災教育の目標を、子どものいのちを守ることと狭く捉えている。

「今」の防災教育

- 防災教育の課題の共有化
 - 「防災教育＝避難訓練」という単発的なイベントの回避
 - 教科・領域における防災教育の実施(→学校づくりの中心理念)
 - 知識を備え、適切に判断し、主体的に行動できる児童生徒の育成
- 「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議(最終報告)」(2012年7月)
 - 「防災教育を受けた児童生徒等が大人になって社会の中心を担い、地域の防災力を高めることで、いわば『防災文化』を形成することにつながる。そのような長期的な視点も重要である。」

「今」の防災教育（課題）

• 「今」の防災教育の課題

- 「子どものいのちを守ること」から「防災文化の創造」にまで、防災教育を発展させようとする発想は、大きな前進として評価できる。
- 学校教育現場でも、防災教育と言えば避難訓練といった考え方はすでに時代遅れのものとなり、地域での合同防災訓練、学校独自の防災マップの作成、自然災害に関するシミュレーション学習など、ユニークな実践も数多く誕生している。
- 国や地方公共団体、各種団体の支援も充実してきた。
- しかし、「まちづくり」と連動した防災教育は必ずしも多くない。
- その理由として考えられるのは、子ども・若者をまちづくりの重要なメンバーとして捉える視点を、大人が十分に共有していないことが挙げられる。

「これから」の防災教育

- 防災まちづくり学習

- 地域(ひと・もの・こと)が教材、そして、教室

防災に関わる地域の
取り組みを知る

取り組みを一つに絞
り込み、関連する情
報について調べる

地域の人と一緒に、
具体的な取り組み
の計画を立てる

防災まちづくりの参
加して、防災文化の
創造に努める

長期的に視野に立って、子ども・若者を(防災)まちづくりの中心に据える

「これから」の防災教育

- 防災くにつくり学習
 - 防災・減災の問題は、「地域」のレベルだけでは、解決できない
 - 「国」のレベルで、構造的にこの問題を考えていく必要がある
- 防災まちづくり学習から防災くにつくり学習へ
- 防災くにつくり学習を進める際の留意点
 - 「知る」「考える」だけでなく、「創る」という視点を大切にする
 - ①自分を創る ②仲間を創る ③社会を創る
 - 防災くにつくりをすすめるには、「国」のさまざまな支援が不可欠である